劇場版風名探偵コナン

遠汐　愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劇場版風名探偵コナン

【Ｎコード】

Ｎ４２１４Ｃ

【作者名】

遠汐　愛

【あらすじ】

ついに動き出した黒の組織！怪盗キッド抹殺計画に乗り込んだ？！…そんな忙しい中で平次と和葉が衝突！一体なぜ？哀も組織のせいで調子が狂い始めたり、もう大変！！そして、コナン（新一）と蘭の関係は…？この小説は、劇場版風名探偵コナンを目指しています！４６４９御願いします！！

第一回～始まり～（前書き）

この小説は、名探偵コナンの劇場版にあこがれている私がオリジナルカップリングを重要視して描きました。劇場版風に小説を描くので、４６４９御願いします。

第一回～始まり～

～第一場面～
交差点の信号が青になるのを待っている、ポルシェ３５６Ａに乗った二人の黒ずくめの男が居た。

一人は長身長髪、もう一人はがっしりとした体格で、サングラスをかけていた。

言うまでも無いが、片方はジン、もう片方はウォッカである。

「おいウォッカ、お前は奴が関わっているあれがどこかのキザな悪党が狙っている事は知っているな？」

「あら、”奴”ってわたしのことかしら？」

突如現れたベルモットが口を挟む。

ベルモットの車には、他に顔に見の覚えのない新人スナイパーが二人乗っていた。

「ジン、心配はいらないのよ？私なりに考えてるから。それに、悪党は、私達のほうよ。ふふ。」

「ははは。でもベルモット、どうやら怪盗…そう、怪盗１４１２号

はかなり頭の切れがいいそうで
すぜ。世間での呼び名はキッドで、神出鬼没とか、大胆不敵って言
われているそうですぜ。」
…とウォッカ。
「まあ、相手は一人だけ。我々がてこずるような相手ではない。そ
れに、たとえどんな切れ者
でも、こいつにかなう奴など居ないからなぁ。」ジンは懐をたたい
てみせる。懐には拳銃が忍
ばせてあるのだった。

「怪盗１４１２号。お前には選択肢が二つしかない。あきらめるか
…、死ぬか。お前に会う日を心
待ちにしてるぜ。」ジンは不敵な笑みを作って見せた。
　やっと信号は青になり、黒のポルシェとベルモットの車は姿を消
したのであった。

～第二場面～
俺は、高校生探偵、工藤新一！！幼馴染の毛利蘭と遊園地に遊びに
言って…黒ずくめの男の怪
しげな取引現場を目撃した。取引を見るのに夢中になっていた俺は

…背後から近づいてくるも
う一人の仲間に気付かなかった。俺はその男に毒薬に飲まされ、目
が覚めたら…体が縮んでし
まっていた！工藤新一が生きているとやつらにばれたら、又命が狙
われ…周りの人間にも危害
が及ぶ。阿笠博士の助言で正体を隠す事にした俺は、蘭に名前を聞
かれ…とっさに江戸川コナ
ンと名乗り、やつらの情報をつかむために、父親が探偵をやってい
る蘭の家に転がり込ん
だ。…省略…。見た目は子供、頭脳は大人！真実はいつもひとつ！

～第三場面～

米花町５番地…毛利小五郎探偵事務所入り口前。野球帽を深くかぶ
った、黒い長い髪でスタイル
も顔立ちもなかなかきれいな少女が一瞬立ち止まって、深呼吸をし
てからチャイムを鳴らし
た。
「ピンポーン」
ガチャン。小さいくせに賢そうな顔をしためがね坊主がドアを開け
た。

「あ、蘭ねーチャン！お帰り！」

めがね坊主とは、正体は高校生探偵の工藤新一の、江戸川コナンの事である。

「蘭～ん！早くお酒を頂戴にゃん♪ゲプゥ。」

この、完全に酔っているオヤジは、眠りの小五郎…毛利小五郎である。

チャイムを鳴らした少女はどうやら“蘭”というらしい。

…ということは、勿論コナン（はちょっと違うかも）と小五郎は家族のはず。

しかし、少女は完全に戸惑っていた。目がきょとんとしていた。

その時！！

「ただいまー！」

戸惑っている少女の後ろに、もう一人の少女が現れた。

「えっ…。え～～～～～！？」

コナンと小五郎は少女二人を見てびっくりしてしまった。

「ら、蘭が二人～？？？？？」

二人が驚くのも無理は無い。

目の前に瓜二つの少女が二人居るのだから。

後から来た少女もキャップをかぶった少女を見てびっくりしている。

キャップをかぶった少女はさっきよりももっと困惑をしながら言いました。

「あの…えっと、初めまして！中森青子というものです！毛利探偵に事件の依頼があって、こ

こまで来ました！話をお聞きしていただけませんか！？」

やっとコナン、小五郎、そして蘭は事が飲み込めたらしい。

「あ、お客様でしたか！…どうも失礼しました！いやぁ～！にしてもうちの娘とそっくりです

な～あはは！」

小五郎は青子に謝っまった。

「えー、こちらは娘の蘭で、こちらは居候の“江戸川”コナンです。さぁさぁ、こちらにどう

ぞ！さぁさぁ！」

…おっちゃん、何でそんなテンション高いんだよ。はは。しかも居候って…。

コナンは微笑する。

まっ、どうでもいいか。事件だ事件！どんな依頼かな～♪

コナンは気を取り直した。ここから”事件“は広がっていった。

～第四場面～

「なっ！怪盗キッドがまたも！」

小五郎絶叫。

「はい、怪盗キッドが富沢財閥のダイヤを狙っているんです。ダイヤの名前はシルバーストーンっていって、普通のダイヤよりちょっと濁っているからそういう名前になったそうです。実際はピンク色で、父が、名探偵の毛利小五郎にシルバーダイヤを守ってもらいたいといっているんです！毛利さん、御願いします！」

「か、怪盗キッドから宝石を守るんですか…。」

はは。おっちゃん、怪盗キッドが嫌なんだろ。ま、何度もあいつにやられてるからな…っいっ

ても、俺もやられてんだよな、毎度毎度。コナンの心のつぶやき。

「お父さん！まさか断る気？」

蘭が手でこぶしを作って見せる。得意の空手で何かやらかすきなのだろうか？

「え、無理ですか？…そんな、御願いします！名探偵！」

「う、め、名探偵…」小五郎、青子の言葉に少し動揺。

「いいでしょう！この毛利小五郎、怪盗キッドからダイヤを守って見せます！」

ついに小五郎は、依頼を引き受けてしまいます。この後の災難の事考えもせず…。

第一回～始まり～（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｏｕｔｄｏｏｒ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｇｌ／ａｉ｜ｔｏｕｓｈｉｏ

わたしのブログです！！アクセス御願いします！！

第二回～平和の間に灰色のひび！？～（前書き）

関西弁や…いや、文自体がめちゃくちゃですが、是非読んで見て下さい！

第二回～平和の間に灰色のひび！？～

～前回までのあらすじ～

毛利探偵事務所に突然現れた中森青子。
彼女は小五郎に「キッドが狙っている宝石和守ってください」と依頼する。
依頼を引き受けた小五郎は、まだ、この後起こる事態など予想もしていなかった。

～第五場面～

「…んで、何でここに大阪坊主達がいるんだよ…。」

「おう、おっちゃん！久しぶりやのう！！」

「おじゃましてるで～。」

青子が訪問しに来て、キッドの資料を渡されてから数週間後。服部平次と遠山和葉が毛利探偵事務所でくつろいでいた。まだ朝の7時だというのに…。

「和葉ちゃんたち…。どうしたの？」

小五郎の後ろから蘭とコナンが現れる。

「あ、姉ちゃんとくど…やのうて坊主！！おきてたんかい！」と平次。

「ごめんなぁ、急に。」と和葉。「あたしらがここにおんのはなぁ…」

「仕事や！！今日、中森っちゅう警部ハンに呼ばれてるんや！何やら怪盗キッドがどっかのえらい財閥のダイヤ盗もうとしとるから、ダイヤ守ってキッド捕まえるためにこの服部平次が呼び出されたわけや！」平次、人の話に割り込むな！（笑）

「そこで、もし良かったらおっちゃん達も来いへんかな思て…（^^♪」

「どや、一緒に行こーや！俺とくど…、（やば！間違ぉた！）俺とおっちゃんが二人で推理すれば、キッドなんかギットギトになるで～！はは！」

おい、今のはなんだよ、寒いぞ服部。コナン、心のつぶやき。

「さむぅ、平次。風邪引くやん。」と和葉。コナンの心の呟きを代弁して言った。

そしたら、いつもなら軽く和葉に言い返して、次の話をしようとしそうな平次が急に…、

「あん、何やて和葉！俺は今のしゃれのつもりや無かったんで！馬の尻尾ドアホが！！何で

お前はいつまでもアホなんや？」

…平次はきつく言い返した。これには小五郎、蘭、コナンもびっくりした。そのとき、平次は

和葉が見せた、一瞬、今にも泣きそうな顔には気付かなかった。

そして、和葉は顔を赤くしていった。

「平次！そない言い方無いやん！もう平次なんか知らへん！さっさと大阪戻って美樹ちゃんと

へらへら遊んでたらどうなん！？」

…探偵事務所内の空気は灰色だった。平次と和葉のけんかを表しているようだった。

「美樹ちゃん」を気にしつつ、蘭が沈黙を破った。

「…まぁまぁ、二人とも。実はね…、お父さんも今日中森警部に会いに行くことになってる

の。だから服部君はどっちみち、お父さんと一緒だね！和葉ちゃんはその間私とコナン君と一

緒に東京を探検しようよ！前回は事件があってちゃんと東京案内できなかったし…」

「ねえ、蘭姉ちゃん。僕はおじさんや平次兄ちゃんと、中森警部の

話聞きにいっていい？ほら、僕いつもキッドからちゃんと宝石守れてるでしょ？」突然コナン。

「そやそや！坊主とキッドは相性ええやろ！せやから今日は三人で警部ハンの話し聞きに行くわ！」

服部、ナイスフォロー！でもよ、キッドと相性いいって、あんま嬉しくねえんだけど…。

（…コナン、心のつぶやき多すぎ！口で言え！）

「じゃあ、とりあえず飯でも食おう！」

ご飯を提案した小五郎。きっと、平次と和葉を気遣っての事。…多分。

そして、事務所の空気が灰色のまま、それぞれが朝食を食べて、小五郎、平次、そしてコナンは警視庁に、蘭と和葉は東都タワーへと向かった。

第二回～平和の間に灰色のひび！？～（後書き）

次回は、数はと蘭がメインで、「美樹ちゃん」の正体を明かします！ご期待あれ！！！

第三回～二人の悩み～（和葉編）（前書き）

関西弁がめちゃくちゃでも気にしないで下さい！江戸っ子なんで上手くかけませ～ん！すみません！

第三回～二人の悩み～（和葉編）

～前回までのあらすじ～
中森警部に会うために上京してきた平次たち。しかし、早速大喧嘩をしてしまう…。そこで蘭と和葉は東京を探検しながら和葉の話を聞くことにしたのだが…。

～第六場面～

「そぉ～のこっ！」

「あ、らぁ～ん！和葉ちゃぁ～ん！」

喫茶店コロンボで話をすることにした蘭と和葉は、園子も呼んだのであった。

「和葉ちゃん！久しぶり！…って、どうしたの??元気ないねぇ。」

「うん…、色々あったんよ。園子ちゃん呼んだんも、相談乗ってほしかったからなんや。」

和葉は悲しい声で言った。可愛そうに。和葉はさっきからこんな調子である。

「まぁとりあえず、中入ろう！」

蘭の提案で三人はコロンボの中に入っていった。

～第七場面～

「じゃあ、女同士の悩み相談会、始めよっか！」

園子が開会宣言をした。

「ここはやっぱ和葉ちゃんからどぉ～ぞ！」

「うん、さっき園子ちゃんにも言ったように、平次が今日怒ったんも、無理は無いんや。

…実は平次、最近ずっと機嫌悪いんや。しかもその原因、あたしなんよ…。」

「えええぇ！？」

園子と蘭はびっくりした。

「和葉ちゃん、それ、どういうこと？」

蘭の質問に、和葉の長い答えが返ってきた。

「…じゃあはじめるね。…あたしと平次の通うてる改方学園の三年に、平次並に頭良うて、

しかもイケメンで、部活まで平次と同じ剣道部の男の子がいるんや！！

でね、私もその先輩に、剣道やってる平次見に行った際に会ったことあって、たまにおしゃ

べりしてたんよ。そしたらなん！！ある日、あたし、急にその人に告白されてしもたん！！」

「へぇ～！！！和葉ちゃん、すごいね！」

蘭がほめた。

「で？もしかしてＯＫしちゃったとか！？」

園子が口を挟んだ。

「そ、園子ちゃん～！あたしがＯＫするわけ無いやん！…もちろん断ったで。“ごめんなさい”

言うて。けどな、先輩がな、“映画だけでも一緒に行こうや！”って言ってきて、あたしも

断りたかったんやけど、理由も無くって…。

…だから“映画だけなら”言うてしもたんや！！」

「えぇ！映画見に行く事にしちゃったの！」と、園子。

「でも、断りずらいよね、そういうのって。」蘭は和葉にフォローする。

「まぁね…。確かに蘭の言うとおりよねぇ。…で、続けて！」

「うん、…先輩と映画見に行くの決まってから二日後、学校の帰り道で平次が突然今週の土
曜に映画見に行かへんか聞いてきたんよ。平次のほうから誘ってくれるの久しぶりやったか
らうれしゅうて、一緒に行きたかったんだけど、先輩との約束の日と、時間帯まで重なって
たんや。」

和葉の顔が少しずつ赤くなってきた。和葉は注文したミルクティーを一杯すすってから話を
続けた。

「…せやからね、断ってしもたんよ。平次と一緒に行くん…。…あん時、も、っっ、も…し
断らなければ…、
ふぅえ～ん。うっっ。蘭ちゃん…園子ちゃぁん！ごめんな、泣いてしもて…。ホンマ、平次
の言った通りやわ…、あたしってアホやな…。うぅぅ。」

和葉は顔を赤くして泣き始めてしまった。

「…和葉ちゃん。」と蘭。

「和葉ちゃんごめんね、無理させちゃって…。」と園子。

「悪いんはあたしやよ。ごめんねぇ…。話、続けるなぁ。」

和葉はハンカチで顔の上を流れる涙を拭いてから、声を絞って話した。

「…んで、平次断って、先輩と映画見に行って来たんや。でね、何事も無く無事に映画見終

った後、一緒にウチ帰る途中なぁ、部活の日曜練習終わって学校から帰ってくる平次に会っ

てしもたんや！！もちろん私の隣に先輩はいたで！」

「…で、服部君が和葉ちゃんがよその男と一緒にいるのを見て誤解したってこと？」

園子が語る。

「…うん。きっとね。たとえそうでなくても、平次、あたしが平次の誘い断わったんは先輩

と映画見に行くためだと知って、長年付き合ってきた幼馴染の自分より先輩を優先したん

か！！？？って思ってるやろな…。」

「…。」

蘭はなんとも言わないが、和葉と平次の関係を心配しているのが顔からして分かる。

「…んでね、次の日学校行って平次に“おはよ”ゆうたんやけど無視されたんや。しかも、

一緒に映画見に行った先輩、なんか誤解したらしくってみんなに自分と二年の遠山和葉は付

き合うてるっ…て勝手に言いふらしてるんや！せやから平次の誤解もさらに深まっていって、

最近は無視はしなくなったんけど、私の事すぐ馬鹿にするんねん！…しかも、最近平次と、

同じ学年のA組の美樹ちゃん…ちゅう子が付き合ってるっていう噂が広まってて、実際に最近

あん二人、良く一緒にいるんよ。美樹ちゃんって可愛い娘やから…あたし、今とっても不安

なんよ！！なぁ、蘭ちゃんに園子ちゃん、あたし、どうすればいいと思う？あたしは今、い

つもどおりに平次に接してるし、平次が気を悪くするようなことなんて一言も言ってひんし

、あたしと先輩の仲もちゃんと否定してるんやで！？なのに、平次、あたしの事避けてるん

や！！…もしかしたら平次、もう美樹ちゃんのこと大好きになっっちゃってるんかなぁ？な

ぁ、なぁ？蘭ちゃん！園子ちゃん！あ、あたし、ほん…っっ、ほんまに…、ぅぅ…、…どな

いしたらええんやろ？？ぅぅ。えーんっっ。ぅぅ…」

…涙声で必死に訴えてくる和葉…。

そんな和葉に、蘭と園子は心を痛めてしまった。

「…今日はいつものあたしの髪飾りと違うやろ？」

和葉が冷静さを取り戻してから言った。

蘭と園子が“そういえば…”とでもいう風に、顔を合わせた。

和葉が続けた。

「いつもあたしが付けとった、りぼんはな、平次が小学生の時、あたしの誕生日に毎年違う

色をくれた物なんよ！！」

和葉の顔の色が一瞬“哀しい赤色”から“幸せな紅色”にかわった。

が、すぐに“哀しい赤色”に戻った。

「…けど、あたしに平次のくれたりぼんをつける資格はもう無いんや。…そう。あたしが悪いんやもん。平次は全然悪くないんや。あたしら、もう永遠に今までどおりにはなれないんかなぁ？」

「…。」

…さっきまで何も言わなかった蘭が、急に立ちあがった。

「そうだよ…和葉ちゃん。今回の喧嘩は、私、和葉ちゃんが悪いと思う！でも、和葉ちゃんが服部君にもっとしっかり話したら、服部君、絶対許してくれると思う！！服部君、和葉ちゃんが大好きなんだもん！」

蘭は気付いたら言っていた自分のせりふに驚いた。和葉が怒っていないか心配だった。

しかし

「ら、蘭ちゃん…！！」

和葉は蘭を尊敬の眼差しで見つめていた。

「そうよ。和葉ちゃん！仲直りしないと！和葉ちゃんが出来ない訳

ないじゃない！二人は結
ばれる運命なんだから♪早くりぼんをつける資格を取り戻そうよ！
蘭と私も協力するから！」
園子、蘭に続く。
「…うん！はやく取り戻さなあかんね、りぼんつける資格！平次が
ホンマに美樹ちゃんち付
き合い始める前に！！…って、蘭ちゃん、園子ちゃん、誤解せんで
な？あたしは幼馴染とし
て平次と仲直りしたいだけやから！！なぁ？」
「ハイハイ…。って、じゃあ“美樹ちゃん”のことは何で言ったの
よ？かぁ～ずはチャ
ン？？」と園子
「あ…、それはなぁ、え～っと…」
和葉は顔を桜色に染めて黙り込んでしまった。
「まぁ、理由はどうとあれ、服部君と仲直りしないとね！！！頑張
れ和葉ちゃん！！」
…三人は頼んでたミルクティーを急いで飲み干して、喫茶店コロン
ボを後にした。

第三回～二人の悩み～（和葉編）（後書き）

いかがでしたか？感想御願いします！！（＾・＾）／～～～
…ついでに、しつこいようですが、私のブログ←
（ｈｔｔｐ：／／ｏｕｔｄｏｏｒ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｇｌ／ａｉ_ｔｏｕｓｈｉｏ）
見に来てくださーい！待ってまぁすっ！！！！

第四回～二人の悩み～（平次編）（前書き）

今回は、平次の視点です！
どうぞ読んで見て下さい！！

第四回～二人の悩み～（平次編）

～前回までのあらすじ～
キッドから富沢財閥のダイアを守るために上京してきた平次と和葉。
しかし、早速二人は大喧嘩をしてしまう！
…そこで、二人を心配したコナンは…

～第八場面～

「んで…、服部、お前和葉ちゃんと喧嘩したのかよ、大阪で。
もしそうだとしたら、おめぇ、いい加減直したほうがいいぜ？その変に意地っ張りな性格。
」「アーホォ！工藤ぉも和葉の奴と同類かい！？俺が悪いって勝手に決め付けんなや！！」

ここは毛利探偵事務所。いるのはコナンと平次だけで、小五郎は麻雀に昼間まで行ってくる
らしく、蘭と和葉は東京探検に行ってしまっていた。
昼までの暇つぶしとして、コナンと平次はチェスをしていた。２時間以上やっているのに、
両者とも強く、まだ勝負はついていない。そんなチェスの試合の最中に、コナンが口を開い
たのであった。

「へぇ〜、服部。悪いのは和葉ちゃんなのか？お前らどんな喧嘩したんだよ？」

「おぅ、説明したるわ！！」平次が言った。

「んまぁ、お前も気ぃ付いてるとは思うけどな、和葉、今日はいつもの髪飾りして無いやろ？」

「そーいや今日はひまわり形のボタンみたいなのを付けてたなぁ…。まぁ、毎日同じ髪飾りしてたから、飽きちゃったんじゃねぇの？」

コナン、軽く交わす。

「ドアホ！！あの髪飾りは和葉が小学生のころからずっと付けてた物なんやで？？いまさらあきるわけないやろ！！！ボケェ！

…それに、あんりぼん…俺がガキん頃あいつん誕生日に毎年違う色あげてた物なんや…。」

平次の顔が一瞬、桜色になった。

…やっぱり、平次と和葉は似たもの同士である。

「…じゃあ、何でだよ？和葉ちゃんがいつものりぼんつけてない理由。」

「つまりや…。あれは和葉からの宣戦布告！！！！！！！っちゅうこっちゃ！！」

「……はぁ？？？？？」

コナンびっくり！！

「お前…。意味不明だぞ？ちゃんと説明しろってんだよっ！」

平次、コナンにそういわれても仕方が無い。確かに意味不明である。

「あぁ、すまんすまん！ちゃんと説明するわ！」

…そして、チェスをやりながらの平次の話が始まった。

「…俺な、実は…和葉にそろそろ自分の思い、伝えよか思ってたんや！！」

「まじ！！どうだった！！」

コナンが急に興奮し始めた。

「アホォ、口挟むなやぁ…。…せやからそんために、“今週の土曜、一緒に映画行かへんか

”ゆうて和葉、誘って見たんや。せやけど和葉に“予定があるんねん”って言われてしもた

んや。まぁ、当然やろなぁ…って最初は俺も思ったで?高校生なんやから予定あったって普

通やし、別に日にちにこだわってた訳でもあらへんし。…ってか、俺もホントは剣道の練習

があったんや。」

平次は適当にチェスの駒を動かしながらいった。そのあとすぐコナンも駒を動かした。

「…けどなぁ、問題があったんや!!」

平次が“バチンッ!”っという激しい音を立てて、駒をまたもや適当にうった。

“…ぱ…ちん…っ…。”平次の駒の音を恐れるかのようにコナンが駒を動かした。

「和葉が俺との映画断ったんはなぁ、俺と同じ剣道部の三年の先輩と映画見に行くためやっ

たんや！！！！！！！！！！！！！」

“バチンっっっ！！！！！！！！！”

平次の打った駒はまたもや激しい音を立てた。

（…たく。駒に八つ当たりすんなって…。）コナン、心の呟き。

コナンも駒を動かした。

「俺は土曜、結局剣道の練習に行ったんやけど、帰りに和葉と先輩がペチャペチャ話して、映画んパンフレット持ちながら歩いてたんをこの目で確かに見たんや！！…つーまーり、簡単にまとめるとこうや！和葉は俺とや無く先輩と映画を見た。…つまり、俺やのうて先輩を選んだ…。…せやから和葉は先輩の事が好きなんや！！…ああクソ！！！俺のどこがイケなかったんやろ？」

「…。」コナン、無言である。

「…工藤。話し続けるで。…和葉がよその男好きになったんはしょうがない。めっちゃ悔しいけど事実や。きっと先輩のほうが良かったんやろなぁ。けどやな、

和葉の奴、嘘をつくん

や！！」

“ばし！”平次が駒をうった。

コナンも続けてうった。

「あいつ…、自分と先輩の仲を否定するんや！学校内でも噂になってるっちゅうのに。…全

く。何でわざわざ嘘つくんやろ？」

“バッシーン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！”

平次がさっきよりもっと強く駒をうった。いい加減やめようよ（笑）

「…。」コナン

しかし、やっとコナンが口を開いた。

「服部…。お前、誤解してるんじゃねーの？」

「あん？それ、どーゆー意味や？？」

「だってよぉ。学校全体で噂されてんのに、自分が本気で先輩の事が好きならば、否定なん

かしないで素直に認めるのが普通だよなぁ？？？しかも和葉ちゃん

がお前以外の男と付き合
うなんて考えられねぇし…。」
「…。」今度は平次が無言になってしまった。
「…だから、俺が思うに、和葉ちゃんの方が先輩に映画に誘われて、断るに断りきれなかっ
たから一緒に映画に行ったんじゃねーの??きっとお前の誘いを断ったのも、和葉ちゃんが
優しかったからで…」
「なんで和葉は俺やのうて先輩に優しくしたんや??」
平次がコナンの話に割り込んだ。
「バーロォ。きっとお前より先に先輩に誘われてたんだよ！　だから服部、お前は何も心配す
る事ねぇんじゃねえの?」
「…そうかのぉ?」と平次。
「…ていうか服部、お前適当に駒うつんじゃねーよ。チェックメイトも何も、お前自分から
倒されようとしてんじゃねーか。はい！俺の勝ち～♪」

コナンはそう言って、自分の駒を動かして、平次のキングを倒した。

確かに、この勝負はコナンの勝ちであった。

「く、工藤！！まさか自分、俺を負かすために和葉との喧嘩の理由聞いてきたんか？？くー

どーおー。汚いぞ！正々堂々戦えっちゅうんじゃ！！」

「あぁ？別にそんなんじゃねーって！人をそう疑うと、和葉ちゃんにマジで嫌われちまうぞ

？ホントは仲直りしたいんだろ？平次君☆」

平時の顔がまた桜色…いや、鮮やかな赤色になった。

「うぅ…。」

平次は黙り込んでしまった。

（さすが工藤やな…。…和葉と仲直りしたいんも、バレテたんかいっ！！）

平次は、密かに思った。

第四回～二人の悩み～（平次編）（後書き）

いかがでしたか？感想やアイディアをバンバン下さい！！あと、少年探偵団（哀含む）もあと少ししたら出す予定です！４６４９御願いします！！

第五回～警視庁にて～（前書き）

今回はいつもより短くって、あまり面白くないと思います…ゴメンナサイ！！あと、１３巻で富沢財閥会長は死亡していますが、そのあと、会長の座は死亡した会長の弟が継いだという前提でこの小説を読んでください！！

第五回～警視庁にて～

～前回までのあらすじ～
上京してきて、早速大喧嘩をした平次と和葉。
そんな和葉を蘭が東京案内に連れて行ってしまったあと、コナンと平次と小五郎は中森警部から怪盗キッドから富沢財閥のダイアを守るように頼まれたため、警視庁に早速話を聞きに言った。

～第九場面～

午後一時。ここは警視庁内の会議室。いつもなら警察関係者が集まって、色々相談している
はずだが、今回は警察関係者以外の人間がいた。
中森警部に呼び出されていたコナン、小五郎、平次、
そして…

「毛利さん！お久しぶりですねぇ！！」

「ほんと、黄金屋敷の事件（原作３０巻）以来ですなぁ…、おぉ、小さな探偵君もいるの
か！！しかも西の高校生探偵の服部平次君！！！！！！！こりゃぁ、オオモノぞろいですな
ぁ！」

…そう。ここには茂木遥史　、槍田郁美もいたのであった。そして…

「小五郎ちゃん！　ほんと、遊園地の事件（探偵たちの鎮魂歌）のときは迷惑かけて、悪かったなぁ…。」…と、竜阿茶もいたのであった。

「おぉ竜！！いたのか！もういいじゃねえか、昔のことなんか。」

…と小五郎。そんな大人の話の最中に、平次がコナンに聞いた。

「工藤ォ、こん人ら、おっちゃんの知り合いなんか？」

「ああ。一度事件のときに遭遇してなぁ。」

「茂木遥史に、槍田郁美。しかも、竜阿茶までいるんかい！おっちゃんもすごい人と知りあいやなぁ…。こら、推理勝負でもしたら面白そうやな！！おし！！後でしてみよか！！！」

「アホかお前！！この人たちは俺らより１０年以上の先輩なんだぜ？？勝てるかよ？？」

「勝てる！！俺が負けるわけ無いやろ！」

（おいおい…。）…コナン、心の呟き。

「んで、竜も、茂木さんも、槍田さんも、何でここにいるんすか？？」

と小五郎が聞いた。

「ん？俺は中森警部殿に呼ばれてて…」と竜。

「私も怪盗キッドを捕まえるために呼ばれて…」と郁美。

「俺も二人と全く同じ。」と遥史。

そしたら急に新たな声が加わった。

「では、警部は僕達名探偵を集めて、みんなで怪盗キッドを捕まえさせるつもりなんでしょうか？？」

「？？？？？！」

「誰や！？」と平次。

「おや、君も呼ばれていたんですか？服部君。」

「げ〜！！白馬探！！！！！！！！！！！！！？」

確かに、会議室のドアを後ろにして白馬探るが立っていた。

（おいおい、白馬のヤロォ…。今“僕達名探偵”って言ったのお前かよ！！）

コナン、二度目の心の呟き。

「…お前、なんでいるんや！！！！！！！！！！！！！」

平次が大声で叫んだ。

「僕も、君達と理由は同じですよ。中森警部に呼ばれたんです。

それより服部君、ここは警視庁ですよ？

声の大きさをコントロールしたほうがよろしいんじゃ？？

…ですよね、中森警部。」

“ふふ、僕のほうが明らかに優秀ですね”と言わんばかりの顔をした探の後ろに、中森警部

が突如現れたのであった。

「あ…ぁ、まぁ、そうだな…。」

中森警部があわてて言った。中森警部には、警視総監の息子と、大阪警察本部長の息子のど

ちらを優先すればいいか分からなかった。
…中森警部は“オッホン”と咳払いをしてから気を取り直してから言った。

「えー。お待たせしました！今回皆様をお呼びしたのは、怪盗キッドから富沢財閥のシルバーダイヤモンドを守ってもらうためです！！ご協力御願いします！！！！」

言うまでも無いが、名探偵達たちの間の空気には緊張感が漂っていた。

「…えー、皆様に私の娘の青子がお配りした資料にも記しておきましたが、今回のキッドの予告は、宝石を確実に守るために一般に非公開で、知っているのは富沢財閥の会長、副会長、といった富沢財閥内でもごく一部の人間とその身内、そして、富沢財閥と友好関係の深い鈴木財閥の会長とその身内、あとは鈴木財閥社長の奥様の朋子さんの大学の後輩の数名と、富沢、鈴木両財閥の一部の友人世界各国の著名人の方たちと、そして

あなた方だけです。今言
った人たちだけはキッドの予告した日に会場内への立ち入り、およ
び、結婚式への参加が許
可されます。ついでに言うと…」
「ちょお待ってーな！」と平次。
「ん？」と中森警部。
「ねぇねぇ中森警部、僕たちに配られた資料にそんな事かいてなか
ったけど？？」
「そんな事って、何だ…」
「結婚式の事っすよ！！中森警部、しっかりしてくださいよぉー。」
と小五郎。
「し、しっかりしてくださいって…毛利さん、あんたには…」
「あ、あ、あぁ…、二人とも…」とコナン
「…もう手遅れやなぁ…。」と平次。
「ガミガミ、グチャグチャ、ベチャベチャ…。」

確かに手遅れだった。

すでに毎回恒例となっている、小五郎と中森警部の微妙な喧嘩が始まっていた…。

…喧嘩が終わり、結婚式で結ばれる事になるのが富沢財閥の富沢雄三と鈴木財閥の鈴木綾子

だという事を教えてもらえたて、他に警察の整備体制などもちゃんと聞けたのは、予定より

遅い6時であった。

第五回～警視庁にて～（後書き）

次回は哀ちゃん、博士、そして少年探偵団が登場します！！！！！

第六回～少年探偵団、参戦！！～（前書き）

あまり進展のない回ですが、読んでください！！

第六回～少年探偵団、参戦！！～

～前回までのあらすじ～
ある日、平次と和葉が上京してきた。そして早速コナンと小五郎、そして平次は中森警部に怪盗キッドの話を聞きに行った。
～第十場面～
「え？あの姉ちゃん結婚すんのか？」
「馬鹿ね。彼女は１７歳なのよ？まだ結婚するわけ無いでしょ。」
「そうですよ元太君！日本では２０歳になるまで結婚は禁止されていますから！！」
「あ～あ。歩美、早く２０歳になりたいな～！」
「あ、歩美ちゃん！？何言ってるんですか！！」
（…おいおい、光彦。）
「ほれほれ、コナン君の話は終わって無いじゃろう！」

コナンたちが中森警部に呼び出されてから一晩が明け、今、少年探偵団５人組は阿笠博士の自宅のソファーでコナンの話を聞いていた。

「…お前ら、話し続けるぞ？園子姉ちゃんが俺たち六人を、園子姉ちゃんのお姉さんの綾子さんと、富沢財閥の富沢雄三さんの結婚式に招待してくれたんだ。俺は行くつもりだけど、お前らはどうすっか？？」
コナンが説明した。
「あら、富沢財閥と鈴木財閥の結婚式に行けるなんて、滅多に無いチャンスだから、参加させてもらおうかしら？？何かの景品として、フサエブランドのポーチでも、出るといいんだけど…。」
哀がポツリと呟いた。
「じゃあ歩美も行く行く！！」
「歩美ちゃんと灰原さんが行くのなら、僕も行きます！」

「うな重とかウメえ物出るか??」
「じゃあわしも保護者役として…。」
歩美、光彦、元太と博士が続く。
これで、みんな参加決定である。
「んじゃあ、決定だな!でもちゃんと大人しくしろよ?沢山の人が招待されてんだから。それに動き回ると警察の迷惑にもなるし…」
「!?コナン君?何で警察の人が結婚式に来るんですか??」
コナンは光彦に指摘された。
「なんかおかしくねぇか?」
元太が続く。
確かに事情を知らない人からすればおかしい話である。なぜ警察が??
コナンは質問に答えた。
「ああ、悪ぃ!言うの忘れてた!!実は当日、怪盗キッドが富沢財閥の家宝とも言える“シルバーストーン”を狙ってんだよ。てなわけで、警察が来るんだよ!!」
「か、怪盗キッド〜!?」
歩美、光彦、元太と博士は声を合わせていった。
いつもどおり、哀だけはなんとも言わない。
しかし、内心は驚いているようだった。
「じゃぁ、怪盗キッドに会えるの〜!?」
「二回目になりますね!!」
「んじゃぁよぉ、今回は少年探偵団でキッドを捕まえちまおうよ!!なっ!」
「いいですね!そしたら僕達かなりの有名人ですね!!テレビとか、新聞にでる訳ですし…。」
「それじゃぁさ!!作戦立ててておこーよ!」
「んだな!」
歩美、光彦、元太は勝手に作戦を立て始めてしまった。
「…で?新一君は何をするんじゃ?」

博士がコナンに聞いた。
「勿論、決着をつけるぜ！！今回は警察の警戒も凄いし、おっちゃんを始め、服部とか、白馬探るとか、竜阿茶とか、沢山探偵も集められてるし、いつもより都合がいいからな！」
「…あら、一対一で正々堂々と勝負しないの？貴方らしくないわね。」
「バーロー！協力してもらうだけだよ！！それに、キッドを捕まえる事より、宝石を守る事のほうが大事なんだよ！！」
コナンはあわてて言い返す。
「でも、彼は毎回盗んだものをあとでちゃんと返してるんでしょ？」
コナンはやられた！！という顔をした。
「…灰原、おめぇって奴は…。ハァ。」
「くすっ。」
哀は笑うと、コーヒーを入れにキッチンに行ってしまった。

第六回～少年探偵団、参戦！！～（後書き）

不定期更新ですみません！！これからも４６４９御願いします。
ｈｔｔｐ：／／ｏｕｔｄｏｏｒ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｇｌ／ａｉ＿ｔｏｕｓｈｉｏ↑私のブログです！！見てみてください！

第七回～思いがけない電話～（前書き）

更新遅くてすみません。

第七回～思いがけない電話～

～前回までのあらすじ～
怪盗キッドが鈴木、富沢財閥の結婚式の日に、富沢家の宝石”シルバーストーン”を盗むと予告したため、コナン、小五郎、平次はキッドを捕まえることになったのだが…。

～第十一場面～
「蘭…。」
「新一…。」
二人は口付けを交わし、永遠を誓い合った…。

バチン！

「い、イって～！…服部、お前ぇ寝相悪ぃなぁ。ったく。人の顔面に腕乗っけんなよな…。」
…当の平次は完全に爆睡しています…。
（…にしても明日富沢と鈴木財閥の結婚式だからって、今変な夢見ちまったなぁ…。服部とか灰原に言ったら確実に笑われるんだろなぁ。いや、まてよ。博士や父さん達でも馬鹿にするか。ハハ。）
そんなことを考えながら、コナンは枕元に置いた自分の腕時計を覗き込んで時刻を確認した。
（あんだよ！まだ夜の１１時じゃねぇか！…服部のせいでもう寝れなくなっちまったじゃねぇか…。おいぃ。）

そんな時。

プルルルル。

毛利探偵事務所の電話が鳴り始めた。
（こんな時間にだれだぁ？）
コナンは事務所のほうに降りていって、受話器を取った。
「ふぁい、こちらモゥリアンテイヒム…」
「ああ、コナン君かね？」
「！！目暮警部！！」
思いがけない人物からの電話に、コナンはびっくりしてしまった。
「夜遅くにすまんなぁ。ところでコナン君、今毛利君や服部君はいないかね？」
「え？？？今寝てるけど…呼んでくる？」
「頼むよ、コナン君」
コナンは受話器を置いて、小五郎と平次を呼んで来た。

「警部殿、お電話変わりました。」
小五郎はコナンに目暮警部から電話がかかってきたと聞いて、急いで事務所に下りてきたのだった。
「警部ハン、こない時間にどうして…。」
平次が小五郎の横から突っ込む。
「おお！毛利君！！服部君！！夜遅くにすまんなぁ。実は明日の鈴木財閥と富沢財閥の結婚式の事なんだが…。」
「え？なんで警部殿が？今回の担当は怪盗キッド絡みですから、この件に関わるのは二課の中森警部達だけだと思っていたんですけど…？」
「そやそや。一課の目暮警部は、殺人しか担当しぃひんちゃうんかったん？」
「あぁあぁ。服部君の言う通りだよ。」
（？？）…小五郎、平次、そして下から聞いていたコナンの三人とも頭に「？」だらけだった。
「あの…警部、よく分からないんですが？…」
「…毛利君、実は明日の件は、一課も関わる事になってしまったん

だよ…。」
「??なんでなん?警部ハン?」
平次が質問した。
そしたら目暮警部がゆっくりと答えた。
「…それは、殺人があるからだよ。」

「!?!?!?」

小五郎、平次、そしてコナンは自分の耳を疑った。

第七回～思いがけない電話～（後書き）

次回も更新遅いと思います（～ｏ～）
ブログ、（ｈｔｔｐ：／／ｏｕｔｄｏｏｒ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｇｌ／ａｉ｜ｔｏｕｓｈｉｏ）
更新しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4214c/

劇場版風名探偵コナン

2010年10月15日21時00分発行